

第93回 糖尿病とスティグマ

スティグマという言葉を知ったことがあるだろうか。烙印という意味で、もともとキリストが磔になったときの傷跡、あるいは奴隷に押された焼印に由来する。病気の多くは、このスティグマとされ、差別や偏見の対象となってきた。たとえば、ハンセン病はらい菌による感染症で、手指や顔が変形するため、古来から強いスティグマの対象となり差別されてきた。映画「砂の器」では、昭和初期のハンセン病への世間の偏見が痛いほど伝わってくる。じつはこのスティグマは、糖尿病のように、もっと一般的な病気にも投影される。

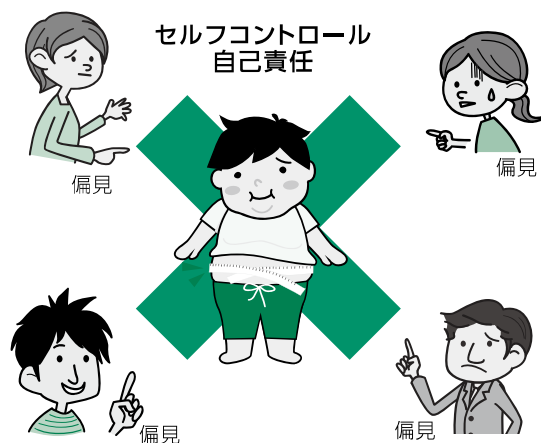
▼糖尿病という病い

糖尿病は生活習慣病のひとつで、食生活の欧米化、車社会で歩かなくなったのと並行するように、患者数が増加している。日本の糖尿病患者は1000万人以上と考えられる。糖尿病のコントロールは食事や運動に影響されるため、自己管理が治療のかなめとなる。そして、この点がスティグマに繋がるメタファー（隠喩）を生み出してしまふ。つまり、糖尿病になるのは、生活の管理ができない、意志の弱い怠け者だから、といった偏った見方である。医師は治療のために食事管理を強く促す。その結果、糖尿病が自己管理（セルフコントロール）の病いであることを、患者に繰り返し植え付けることにもなる。医療人類学者の浮ヶ谷幸代は、その著書「病気だけど病気ではない」で、糖尿病という病いを分析している。糖尿病は自分を厳しく律すれば良くなる病気であり、病気が良ならないのは本人の責任だという一面的なとらえ方をされやすい。この背景には、個人の自立が尊ばれ、社会に役立ち機能することこそ意義がある、という近代特有の暗黙の価値観があるという。浮ヶ谷はこれを「セルフコントロールの神話」と呼ぶ。

▼スティグマに向き合う

スティグマにはあからさまな職業や結婚差別を伴うものと、患者自身がスティグマを取り込んで内面化する場合がある。この内面化とは、患者自身が糖尿病のために、自分を卑下したり、不当な扱いを受けても甘

んじて受け入れてしまう傾向である。冷静にみれば、糖尿病になったこと、糖尿病のコントロールがうまくいかないのは、社会の変化に伴うストレスや家族・職場条件など、個人の努力だけではどうにもならないことも大いに関係している。だが、セルフコントロールの神話を信じる限り、糖尿病への偏見は消えない。糖尿病のスティグマを作り出しているのは、あまりにも個人の自立と責任を重んじすぎる近代の文化傾向かもしれない。糖尿病についての正しい知識、そしてスティグマを作り出しているのは私たち自身であることに気づくこと、が大切である。自己責任ばかり問う社会は、貧しい世界だ。豊かさとは、相手をありのままに見ること、スティグマに振り回されないこと、そこから始まるのではなからうか。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにぐち しんいち)